



R8(2026)年度 白樺サロンの会 志賀直哉旧居特別講座

古都奈良は今なおわれわれを
美的世界へと誘います。この講座
では、古都奈良が今日に伝えた
遺産と、今にみる文学作品や美術
について、その魅力を語ります。

古都の美と、近代の文学とを、
ともに鑑賞しながら、志賀旧居講
座の午後を心ゆくまで味わって頂
きたく思います。

古今東西の文学の世界から 今 人間を考えてみる

3月16日(月) 14時～15時30分
「泉鏡花『化鳥』を読む」

西尾元伸 帝塚山大学教授

『化鳥』(明治30)は、泉鏡花にとって最初の口語体小説の試みであったと言われる作品です。その具体的な方法は、母と二人で橋番小屋に住む少年・廉の一人称による語りの採用にあります。母は「人間も鳥獣も草木も、昆虫類も、皆形こそ変つて居てもおんなじほどのもの」(第六)と教え、廉はその言葉を世界の成り立ちのように信じています。このような一人称語りを読むとき、私たち読者はひとまず、少年・廉の視線に同化して母に教えられた世界を見つめることになるでしょう。本講座では、そのような語りのあり方や、視線の持つ意味に留意しつつ、鏡花の作品史においても重要な意味を持つことになる『化鳥』を読み解いてみたいと思います。

4月20日(月) 14時～15時30分
「古(いにしえ)と今(いま)を考える-志賀直哉に見るものから」
呉谷充利 相愛大学名誉教授

志賀直哉は西洋近代の絵画や彫刻から東洋の古美術へと美の対象を変えて行きます。このことを敷衍して、フランス十七世紀末に見る古代派と近代派の論争を日本の古学に重ねてみながら、今日の文明にたいする古代の人間の生を考えてみたいと思います。

5月18日(月) 14時～15時30分
「サルトルは難しくない!-『嘔吐』の三通りの読み方」
東浦弘樹 関西学院大学教授

サルトルとか実存主義哲学とかいうと難しいとお考えの方も大勢おいででしょう。しかし、決してそんなことはありません。1938年に出版されたサルトルの処女小説『嘔吐』を読めば、サルトルの言う「実存的不安」なるものが誰の心にもある極めて人間的なものであることがわかるはずです。本講座では『嘔吐』のストーリーをわかりやすく紹介した上で、この作品を1.吐き気の原因を究明し乗り越えようとする男の物語、2.孤独を解消しようとする男の物語、3.性に対する恐怖に密かに苛まれる男の物語という三つの観点から考えてみたいと思います。

後期日程 ※変更となる場合がございますので、何卒ご了承ください。
(いずれも14時～15時30分開催)

- ・10月19日(月) 奈良県美術館(予定)
- ・11月16日(月) 美術史家 愛知県美術館 平瀬礼太館長
- ・12月21日(月) 奈良女子大学文学部 吉川仁子准教授
「池田小菊『帰る日』—奈良を舞台にした新聞小説」
小菊の出世作である『帰る日』奈良を舞台にしたこの作品についてお話しします。

<参加費>各回500円 入館料込 定員25名(申込先着順)
<申込先>学校法人奈良学園セミナーハウス志賀直哉旧居
奈良市高畑町1237-2 TEL/FAX:0742-26-6490
E-mail: seminar@naragakuen.jp



志賀直哉旧居 HP